

「1988年に行った伊吹島の調査」と現代の伊吹島

稲田 道彦（香川大学経済学部教授）

[本城先生]

香川大学経済学部教授の稲田先生から「1988年に行った伊吹島の調査」と現代の伊吹島の題で話をさせていただきたいと思います。

[稲田先生]

「1988年に行った伊吹島の調査」と現代の伊吹島

経済学部
稲田道彦

「1988年に行った伊吹島の調査と現在」ということで話をさせていただきます。実は今日伊吹島のことにに関して一番詳しい三好様に来ていただいて、伊吹島の話をしようと思っております。瀬戸内海の島というのは、今、人口がどんどん減って、人が住まなくなるのではないかとの恐れのある島すら出現しようとしている状況にあります。その中で、伊吹島は産業のある島、特にイリコを中心とした産業のある島として、我々は認識

できました。今日はそういう島が「現在どのような状況であるのか」ということを三好様にお話しさせていただきたいと思っております。

その前座としてですが、実は、私達、1988年にこのような調査をしました。「瀬戸内海と東部島嶼地域の変貌に関する基礎研究」というもので、伊吹島を事例とした研究です。福武財団から当時60万円いただいて写真のような報告書を作る機会がありました。いろいろなところに配布してしまったので、もう手元にはこの1冊子しか残っていませんが、その当時の伊吹島の話を私からさせていただいて、三好様の話に繋げていきたいと思っております。



目次はこのようになっております。リーダーの山崎和先生が調査の途中に白血病でお亡くなりになられたので、私と新見治先生で行いました。新見先生が水を中心とした研究、それから私が文化と漁業を担当しました。今日はその新見先生の研究の成果も使っていただきながら、お話をしようと思っております。

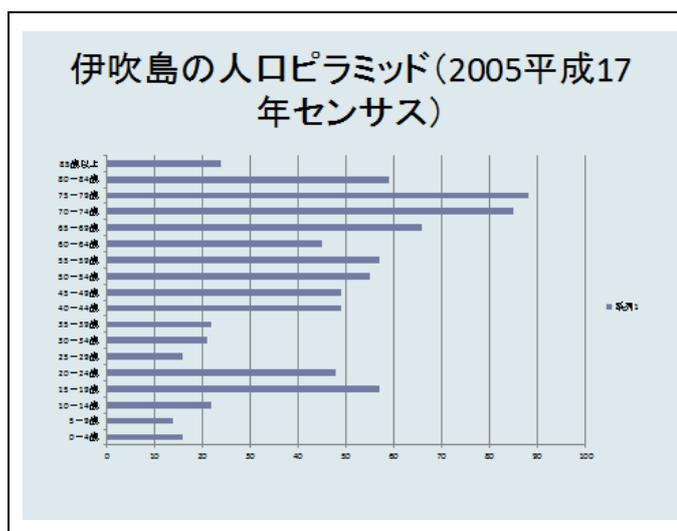
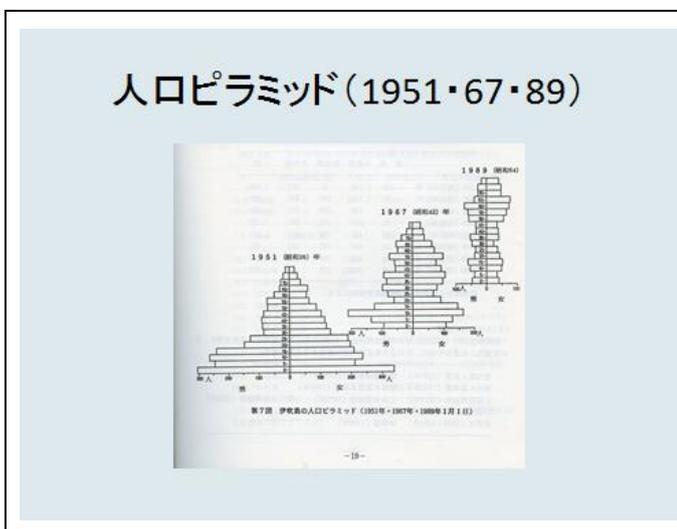
右図は伊吹島の人口ピラミッドです。これが 1951 年です。ちょう

ど私も三好様も同い年で、生まれ年の一番下、すごい大きなピラミッドになっている世代です。それが 1989 年になると、このように変わっています。でもまだ世代でそんなにデコボコがない状況です。

その下の図が 2005 年の人口センサスのピラミッドです。ひどい出っ張りがありますが、これは年齢の上の層が厚くなっていることを示しています。やはり言えることは、働き盛りの世代が島から欠落しているということが、島にとって大きな問題だろうと思います。

次の図がイリコの生産量と価格のグラフです。もう 25,6 年前の話ですが、ずっとイリコの生産が上がっていて、すごく景気の良かった時代です。16 軒の網元で、1 軒当たり平均すると 2 億円の儲けがあった時代です。ですから「これから伊吹島は上り調子で良くなるだろう」と皆思っていました。その時代から約 30 年弱経過した現在の話を、今日は三好様から聴かせていただけるのではないかと思います。

目 次	
1 はしがき	1
2 総論	
2-1 島を見る眼—鳥瞰研究の視点と方法—	3
2-2 瀬戸内海東部鳥瞰地域の概要	6
3 香川県伊吹島の地域社会の変貌	
3-1 伊吹島の概要	16
3-2 主産業としての漁業	21
3-3 土地利用と産業の変化	32
3-4 伊吹島の社会組織と基制	36
3-5 水と生活・産業	41
3-6 伊吹島に関する文献・資料のリスト	57
3-7 伊吹島の景観（写真）・新聞記事	59



うな形で外に出て行きました。泉佐野市は、今、関西空港のちょうど漁場になっていますから、ここに移住した人々はかなりの収入を得ていたのではないかと思います。僕らが伊吹島に行った当初は、泉佐野市に島民が移ってからそんなに時間が経っていない時期でした。「泉佐野市に漁民がいなくなったので、そこの漁業権を買って伊吹島の二男、三男が移って行った」というような話を聞きました。

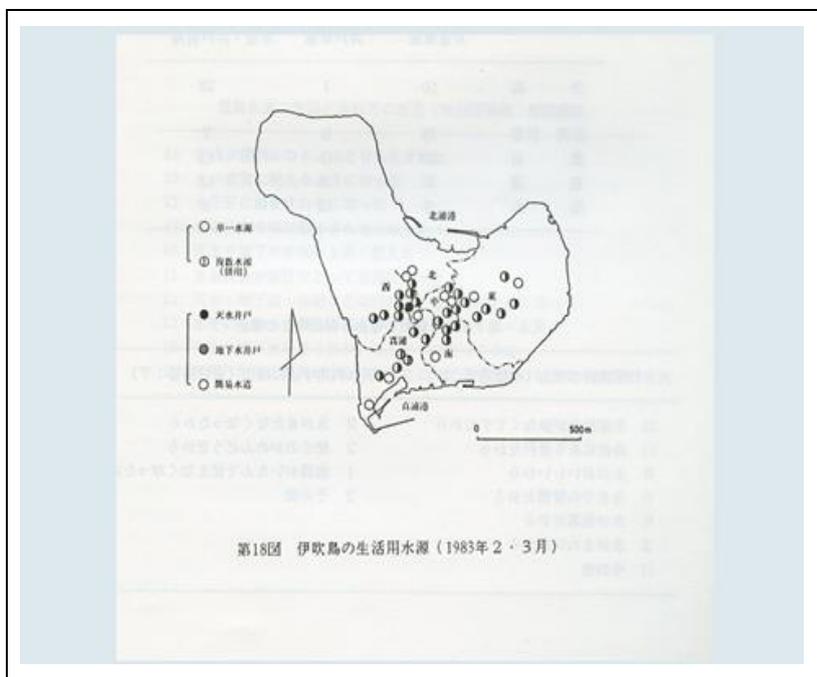
伊吹島は非常に特殊な地形で、1mも掘ると岩盤に行き当たってしまいます。土壌が1mも積もってないような島で人々が生活してきました。つまり、地下水がない、川もない。このため、水にはすごく苦労しており、当時は天水を溜める大きなイヅミを作って生活していました。他の島もそうなのですが、「いかに小さな島で水を得るか」という工夫、本当にいろいろな工夫をしてきた島の一つです。今では海底送水管が通っております。

水を得るために

1983(天和3)年	ヒラヤのイヅミ(平井井戸)の創設
1952(昭和27)年	簡易水道の創設(集水路・貯水池の建設)
1964(昭和39)年	7つの部落共同井戸の設置
1967(昭和42)年	電気専人事業(海底ケーブルの設置)
1968(昭和43)年	小学校海水プールの設置
1973(昭和48)年	簡易水道事業の完成(給水船「ひうち」の就航)
1978(昭和53)年	電気増強事業(海底ケーブルの設置)
1984(昭和59)年	簡易水道改良事業の完成(海底送水管の敷設)

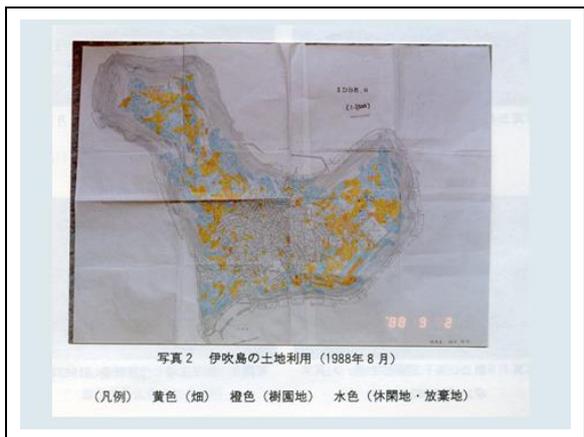
以下、伊吹島における水利利用の展開の過程を、第1期から第4期に区分し、人々の生活や水産加工業と関係づけながら概観してみたい。

右図は新見先生がなさった調査です。丸は単一の水源を示します。複合した水源は真ん中で切っております。黒丸は大井戸という天水を溜めた井戸で、後ほど写真をお見せします。各家にあるのは地元の人が「井戸」といっている水をためる装置です。これは岩盤を掘って、小さな1mから3mくらいの穴に雨水を溜め、それを飲み水にしていたシステムです。簡



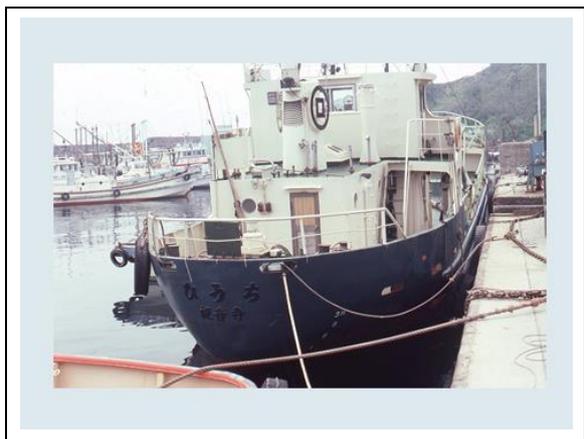
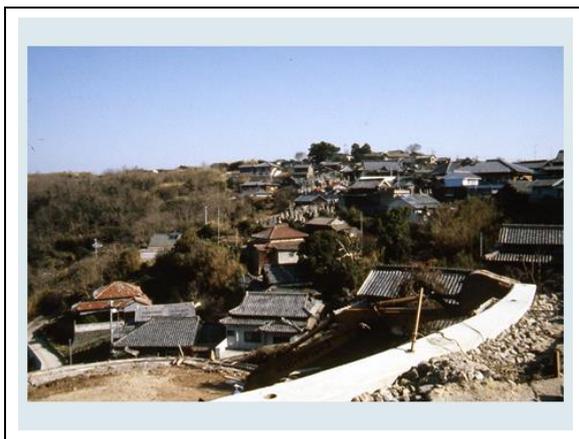
易水道が造られたばかりですけど、白のは簡易水道を示します。今はもう完全に海底送水による水を得るシステムになっております。ですから、このように「水をいかに得るか」ということで、本当に苦労した島です。

また、「得た水をどのように使うのか」、いろいろと工夫してきた話を聞くことができました。これは1971年の土地利用を示した地図です。黄色く色塗りをした所が畑です。1988年の地図では、その多くが青色の耕作放棄地になっています。つまり、もともと土壌のない島ですから、そこでやる農業というのは限られています。しかし、農業をしなければ生きていけない時代。そこから、イリコの景気が非常に良くなって行って、そのような農業をしなくても良くなった時代です。



下は当時の写真です。あとで三好様の話に出てきますが、出部屋を壊す理由になった道が付いている時代の写真です。

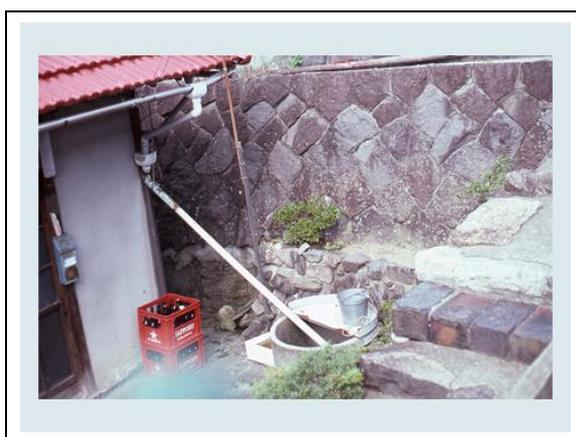
これは島に水を運んでいた「燈^{ひょう}打ち」という水船です。簡易水道が付いていましたが、足りない水を運んでいました。この船で島に水を運んで、山の天辺までポンプアップして、そこから水を配った時代のものです。



それから伊吹産院。たぶんこれも三好様の話に出てくると思いますが、壊したばかりで、うしろに屋根瓦とかいろいろなものがあります。つまり僕らが行った時は伊吹産院を見ることができなかったのですが、その壊した建物の跡がいっぱいある時代でした。それが数年すると整地されて、こんなにきれいになっています。



さっき申し上げた人々が井戸と称しているのは、こういうシステムで雨樋から樋が写っているのが分かると思います。このような井戸の中に水を入れて、この水が一番貴重な飲料水になっていました。ですから「この水をいかに使うのか」ということで島の生活が成り立っている時代がすごく長く続いていました。



これが大井戸の写真です。天水がここに流れ込み、それから生活排水も全部ここに流れ込んで、この水を使っていました。まだこの時代は廃棄されていなくて、使おうと思えば使えますが、そのような水はあまり使わなくても良い状況にはなっていた時代です。この写真を見ると、まだ水が澄んでいて使える時代です。しかし、今はもうゴミが溜まって、全く使えない状況になっております。



我々が調査した 1988 年、約 30 年前は、「伊吹島はこれからすごく良くなる」というように思っていました。イリコの網元が平均で 2 億円はかなり大きな儲けであり、たぶん島はこれからいろいろな形で発展するだろうと思っていました。

では、私の話はこれくらいにして、三好さんにバトンタッチしたいと思います。